

ジャグパル

JugPal

2009年3月14日 第43号



インタビュー

【松山 光伸 さん】

皆さんは Mizuhara Gintaro という日本人曲芸師(1875 - 1952)をご存知でしょうか。彼は1887年、わずか12才で渡英し、十代半ばですでにジャグラーとして名を挙げ、英国の舞台で長年にわたり活動しますが、それ以外にも米国での5年間をはじめ豪州・ニュージーランド・南ア・オーストリアをまわるなど国際的に活躍していた曲芸師です。

生誕百数十年の時を経た2004年、とある日本のマジック愛好家が旅行先のロンドンのマジックショップでたまたま手にした本の中の一枚の写真と運命的な出会いをします。写真の人物は Gintaro、愛好家が今回のインタビューの松山光伸さんです。この出会いが松山さんのそれまでの活動を大きく転換させるキッカケになります。



松山 光伸 さん

松山光伸(まつやま みつのお)さん、昭和23年1月横浜市に生まれる。

小さい頃からマジックや曲芸やサーカスなどのパフォーマンスに興味がありました。小学6年生の時、テレビで放映開始された石田天海のマジックショーに震えるような感動をおぼえ、子供心に天海と言う人物の偉大さとその生み出す芸の深い芸術性のとりこになります。。

中学生になると頻りに百貨店のマジック売場に通うようになります。ほどなく売場のアドバイスで日本奇術連盟に加入し高木重朗氏が教えていた講習会で本格的にマジックを学びはじめます。つまり石田天海に動機づけられ、高木重朗に指導を受けるといふ幸運に恵まれます。

高校・大学時代はクラブ(奇術愛好会)に属し、演技の腕を磨いたりオリジナルを考えたりすることに熱中するかたわら、二川滋夫、風呂田正利、沢浩、近藤博氏ら多くの知己を得るなど志の高いマジシャンとの行き来が増えます。

就職してからは仕事に忙殺され、マジックからは遠ざかるものの、あるとき思い立って夏休みに数日の有給休暇をつけて単身米国へ渡り、そこで文通をし始めていたマーチン・ガードナーや当時氏と行動を共にしていたジェームス・ランディらと親しく交流するとともに、ニューヨークやラスベガスのマジシャンの集りも経験します。

この時、米国のマジシャンらと作品を見せ合う中で、言葉のうまい下手には関係なく、自信のある独自のものを持ち、それに相手が興味をもちさえすれば対等にやりとりできるという社会の本質を肌で学びとります。この原体験が後に仕事をする上でも、現在の歴史研究で情報収集をする上でも大いに役立っているといえます。

しばらくブランクをはさんだ後、自宅でも遠くの人とやりとりできるパソコン通信の可能性に興味を持ちます。ネットで先駆的な活動をしていたマジック・ディーラーのジェフ・バスビー氏の深い知識や気概に触れたという経緯もあったそうです。そしてニフティサーブ内にマジックフォーラムを立ち上げて、メンバーが活用できるようにショップ情報やビギナー向けのガイドなどをライブラリ化するなど、徐々にマジックに復帰します。

ここ20年は専門誌「不思議(1981～1989)」や「ザ・マジック(1989～2009)」等でマジック解説や動向記事の連載を手がけ、「セルフ・ワーキング・マジック事典(東京堂出版)」も出版するなど精力的な活動を行っています。

さて話は冒頭に戻ります……

松山さんと Gintaro との出会いは全くの偶然でしたが、たった一枚の写真から運命的なものを感じとって Gintaro のたどった人生を調べてみようと思立ちます。その成果内容についてはここでは紹介致しませんが、以下メディアにて発表されていますので是非ご覧下さい。

雑誌「ザ・マジック(No.62 - No.65)/東京堂出版」タイトル:国際芸人の先駆者、ジントローの生涯

Webサイト「マジックラピルス」タイトル:国際芸人の先駆者、ジントローの生涯

<http://www.tokymagic.jp/labyrinth/index.htm>

一枚の写真(右)を見て Gintaro に興味を持たれたとのことですが、歴史研究者でもない松山さんが何故異国で活動していた昔のひとりの日本人曲芸師の人生を調べようとしたのですか？

『 Mizuhara Gintaro …その名は私ばかりか日本では誰にも知られていない人物でした。志を持って19世紀末に英国に渡り、当時全盛を誇っていたマスクリンやデバントという世界をリードするマジシャンに請われ彼らと同じ舞台上で活躍していたとわかりましたが、自分が取り上げない限りは再び埋もれたままになってしまうと思いました。その時までにはマジックの解説や動向記事を一般読者に向けて書くことが重要と考えていましたが、そういうものは他の人でも書けるもので、むしろあまり注目されてないこの人物を掘り起こすことこそいま重要だと気付いたのです。そしてその方が奇術界に何らかの貢献ができそうだと思います。』



書籍「ST. GEORGE'S HALL」に掲載されていた運命の一枚の写真

百年も前の、しかもほとんどを異国で過ごしたひとりの芸人の人生をたどることは大変だったと思いますが不安はありませんでしたか？

『 全くのゼロからのスタートでした。演技記録はもちろんのこと、出生情報、渡航記録、パスポート発行記録、居住地記録、結婚届、帰化申請書、死亡届、国勢調査等々の情報収集のノウハウなどまったくありませんでした。ところがそんな心配は無用でした。実際に扉を叩いてみると次から次へと新しい扉が開き、そこから新たな事実がいくらでも出てくるのです。Gintaro 研究でこの経験があったからこそ、その後不安なくマジック史にも注力できたのです。』

もう一つ重要なことがあります。一般的に歴史というのは、すでに先人が苦勞して調べてきているはずですから、後の世代の人が取り組んでももはや新しい発見などほとんど期待できないのではないかと普通だったら思います。実際にマジック史に取り組んでこれは杞憂であることがわかりました。

今は古い資料がスキャンされデータベース化が進んでいます(日本では遅れていて特に公的記録にはそのような動きはなくこの分野では後進国とのこと)。従っていままで研究者が近寄りなかつたものまで容易に検索できるような環境が急速に整いはじめているのです。こういった動きが世界中で起きているのですから最近の歴史研究の進展にはすごいものがあります。エキサイティングな転換期にあるといっていいいでしょう。

こういう状況認識や調査のノウハウはぜひ共有してもらいたいと思っています。歴史に目を向けてくれる人が増えれば、この分野は急速に広がりを見せると期待しています。』

歴史研究の面白さはどのようなものですか？

『正直、Gintaro と出会って歴史研究を手がける前までは、歴史自体に興味がありませんでした。学生時代から記憶するだけの科目という印象があったのです。ところが Gintaro の足跡を細かく調べていくと、当時のロンドンの様子や英国の制度などを知ることになり、その中で Gintaro がどうしてこのような行動をしたのかという理由も徐々に読めてきたりします。これから彼はこうした動きをするのではないかなと推測するとその通りだったりして。もちろん狙いを定めて調べても空振りするほうが遥かに多く何度落胆させられたかわかりません。でもそうしていくうちに私が彼と一緒にその時代を生きているかのような錯覚を覚え、その時代を感じとり、その世の中が見えてくるのですよ。タイムトリップして彼と一緒に古い街並みを歩いているような感じになって本当に楽しいのです。正に時代を超えた海外旅行の気分です。

また調べていくと彼のことだけでなく当時の芸能界の事情とか他ジャグラーやマジシャンのことも自然にわかってくるので、どんどん興味が広がっていきます。最も古い渡航芸人の栗田勝之進の海外での動きもほとんど見えてきましたし、Virtuosos of Juggling に出ていた Takashima という初期の芸人の写真は1901年9月の Cassell's Magazine という英国誌に出ていた Ichimatsu の写真を取り違えて編纂していたものらしいということもわかってきました。周辺のことがこんな形で芽づる式に見えてくるのも面白いところです。』



日英同盟下にあった第1次大戦中のステージ(40才頃)
(所蔵: Peter Lane氏)

IJAの機関誌である JUGGLE (Summer 2008)に Peter Brunning さんによる「Gintaro Mizuhara」という記事が掲載されていましたが、

『英国にある世界最古のサークル「ザ・マジック・サークル」の機関誌である「ザ・マジック・サーキュラー」に Gintaro に関する私の記事を掲載していただいたところ、すぐに二人の方から連絡が入りました。ひとりは何と Gintaro の舞台道具を持っている方で、もう一人が Peter さんでした。彼は私の手が届きにくい英米の情報を追加発掘してくれ、それを付け加えて JUGGLE誌に発表したというわけです。

Gintaro が Maruichi Brothers の名で鏡味仙太郎と2年間組んでいたことを最終的に突き止めてくれたことや、Gintaro が一時期柔術の先生をしていたことを把握したのは彼でした。日本国内の調査では行き詰まることでも、海外で深く調べると判ってくることは多いですから、ボール(情報や疑問点)を世界に投げてみることは極めて重要です。何がしかのボールが跳ね返ってきて一気に視界が開けることも多いのです。

いま彼とは Gintaro の墓石を再建するための手続き等に四苦八苦しているところです。』

歴史研究の必要性についてはどうお考えですか？

『欧米では奇術史に関する研究が盛んですが、日本ではこの分野の研究は少ない状況です。それは、日本では文化を表層的にしかとらえていないところがあるからで、マジックでも技術面や新商品等に焦点があたりがちです。奇術史があまり注目されてこなかった結果、実際に幾つかの問題点が顕在化しています。まず今まで語られたり本になつたりしている日本手品の歴史には多くの誤りがあることが確認できました。そしてそのような古い資料を孫引きしただけの情報が今も使われているのが実態です。

限られた情報しかなかった昔の研究者は大変苦労したと思いますし、推量して記述する部分も多くならざるを得なかったのは当然です。ただ過去の遺産だけに寄りかかっている世界に進歩はありません。海外への影響も問題です。もともと海外に発信されている情報量は限られていますが出典等を示さない古い情報が細々と海外に流され、それが日本の手品史のすべてとして理解されているのです。誤解された記述が流布していれば、正しい情報を発信して誤解を解かなければなりません。火消しも大変なことなのです。

また Gintaro の例をとっても分かるように日本人が知らない日本人マジシャン(芸人)が海外で活躍していたということがあります。海外では紹介されているのに日本人自体が知らない。こういったことは日本にフィードバックしなければなりません。

一方、海外で日本人として大活躍したとして世界史では有名になっているマジシャンが、実は日本人ではなく、日本人のふりをして活動していたといったケースもあります。そういったことが判るにつれ明らかになったことはキッチンと記しておかねばならない義務を感じています。

欧米では奇術史の研究が盛んといわれましたが書籍はたくさん出ています。奇術大会はアチコチで行われていますが、米国では Conference on Magic History という隔年の大会もすでに20年となり250人の規模で集まるようになっています。また、マジックのオリンピックと言われるFISM大会では前回の2006年から歴史研究の分野として新たに History and Research Award が設けられました。彼我の差は拡大しているといっているでしょう。』



第二次大戦中に ZISKA の名で出ていたステージ
(所蔵: Peter Lane氏)

Gintaro の件が一段落した現在の研究活動は？

『いまは幕末以降の日本奇術史を追いかけています。ある程度全貌が見えたら江戸時代に遡っていこうと思っています。そして研究成果は海外にも紹介し世界に正しく伝えていかなければ意味がないと思っています。これらはすでに「実証・マジック開国史」として雑誌「ザ・マジック」のNo.66から連載しています。



Gintaroの使っていた道具
(撮影: Stuart Fell氏).

またニューヨークにある奇術史の研究機関である「カンジュリング・アーツ・リサーチ・センター」の機関誌「Gibecière」にも連載をはじめました。この機関からは全幅の信頼を得、有難いことに何ページでも自由に使って良いと言われました。それだけ欧米以外の情報が不足しているのです。原稿料はもらえない仕事ですが、発表させてくれることに感謝し精力的に取り組んでいます。またWebサイト「マジックラビリンス」でも新シリーズ「マジック史の証言」の連載を開始しましたが、ここでは既に明らかになっていながら雑誌に書ききれないエピソード的な部分を紹介していきたいと思っています。』

松山さんは Gintaro の調査の過程でザ・マジック・サークルとのお付き合いも深まり、現在は会員となり日本地区の代表 (Representative for Japan Region) を託されるようになりました。

今後はこうした海外の活気あるサークルの活動内容を日本に紹介したり、海外と日本のサークルとの交流の仲立ちをしたりすることを考えられておられるようです。ますます多岐にわたって活躍される様子でマジックファンにとっては楽しみです。

[おまけ]

松山さんは現在外資系企業にお勤めですが、私にとって実は大学のクラブ(奇術愛好会)の七学年上の先輩です。

また、私がジャグリングに興味を持ち始めた20年ほど前に、当時国内では販売されていなかった道具を海外から個人輸入しようとして、ニフティサーブ内のマジック・フォーラムでショップ(忘れもしないDubé)を紹介してくれた方が (パイ:ハンドル名)こと松山さんでした。それも一つのきっかけでジャグリングにハマってしまい、おかげでこんな今の私になっちゃいました。(^^)

私にとっては尊敬すべき良き先輩であり、今回 Gintaro のおかげでこうやって親しくお会いしてお話することができ、なんだかとても不思議な心持ちです。Gintaro に感謝。

[安部 保範]



書籍一覧

幕末から明治期にかけて海外に渡航し活躍した曲芸師について書かれた書籍の一覧です。蔵書からピックアップしましたが、興味ある方のご参考までに。(書評ではありません)

【日本人登場 - 西洋劇場で演じられた江戸の見世物】 (写真1)

三原文(著)/松柏社/2008(H20).3.30初版

[帯書き] 江戸の嘉永から文久年間にかけて、軽業見世物は全盛期を迎えていた - 蜘蛛舞の流れを汲み、寸分違わぬ正確さと細やかな技芸で魅せる日本の軽業は西洋の人々にどれほどの衝撃を与えたのか。西洋と東洋の演劇文化の衝突、融合、理解の跡を見ることができ、さらに日本芸能を再認識する稀少な一冊。



(写真1)

【江戸の見世物】 (写真2)

川添裕(著)/岩波新書(岩波書店)/2000(H12).7.19初版



(写真2)

【海を渡った幕末の曲芸団 - 高野広八の米欧漫遊記】 (写真3)

宮永孝(著)/中公新書(中央公論新社)/1999(H11).2.25初版

[帯書き] 悲喜交々の異文化体験記に幕末市井人の姿と海外事情を読む。慶応二年(1866)秋、曲芸師一行が横浜を旅立った。目的地はアメリカ、高野広八を後見役とする一行の名は帝国日本芸人一座。その妙技は各地の観客を魅了し、好評の中、巡業地をヨーロッパまで広げる。この間、一行はアメリカ大統領をはじめ各国の貴人・有力者との交流を行なう一方で、好奇心旺盛に巡業地の町を散策したり、取り囲んだ野次馬と乱闘したり、夜は娼婦を求めて出歩くなど、市井人ならではの約三年に及ぶ異文化を体験する。



(写真3)

【海外公演事始】 (写真4)

倉田喜弘(著)/東書選書(東京書籍)/1994(H6).10.31初版

[帯書き] 日本人のイメージはこうして定着した。初の海外渡航者は軽業師、万博に出場した芸者たち、ハラキリ、ゲイシャ...ほか欧米の日本人観のルーツや国際化を急務とする日本側の思惑などを、克明に描く。



(写真4)

【海を渡ったサーカス芸人 - コスモポリタン沢田豊の生涯】 (写真5)

大島幹雄(著)/平凡社/1993(H5).8.20初版

[帯書き] 彼が追い求めた<夢>とは何だったのか。16歳で日本を飛び出し、ヨーロッパ最大のサーカス団<サラザニ>の看板スターとなった沢田豊。ロシア、ドイツ、イタリア、南米<ブラジル>、中国と異郷を巡業しつづけた芸人の国境のない旅。



(写真5)

【ニッポン・サーカス物語 - 海を越えた軽業・曲芸師たち】 (写真6)

三好一(著)/白水社/1993(H5).8.10初版

[帯書き] 十九世紀末の大スペクタクル。幕末から明治、欧米で活躍したニッポンの軽業・曲芸師たちの驚異の軌跡と、上方で人気を呼んだ見世物や博覧会の楽しい逸話を、貴重な錦絵・ポスター・引札で鮮やかに再現した、ユニークな歴史読物。



(写真6)

【鳥瀧小三吉伝 - 海を渡った軽業師】 (写真7)

山田稔(著)/無明舎出版/1988(S63).5.20初版

[帯書き] 数奇で波瀾万丈の生涯。北国の名門一族に生まれた変わり種、軽業師小三吉の謎多き数奇な生涯をノンフィクション・ノベルの手法で描く。



(写真7)

【大世紀末サーカス】 (写真8)

安岡章太郎(著)/朝日新聞社/1984(S59).9.30初版

[帯書き] 幕末維新の動乱の世、日本人の曲芸一座が世界へ巡業の旅に出た - アメリカで大統領に謁見、パリでは万国博に参加、ロンドンで女王も御見物、さてスペインでは革命が...サーカスに託して、<同時代の歴史>を描く会心作。



(写真8)

【異國遍路 旅藝人始末書】 (写真9)

宮岡謙二(著)/修道社/1959(S34).7.15初版



(写真9)



松居慶子 Tour 2008 Live Japan (11月14日/葛飾シンフォニーヒルズ モーツァルトホール)

ジャズコンサート。チラシや新聞広告のみを見て予備知識なしで劇場等にでかけることが往々にしてあるのですが、今回もたまたま目にとまった小さな新聞広告での『全米ビルボード第一位！全米スムーズジャズ最優秀アーティスト賞受賞』という謳い文句と、写真(陶醉した感じでピアノ演奏する美女の横顔)に惹かれて出かけました。(汗) 実は名前すら知らなかったけれど、彼女は日本国内よりも海外で活躍されているピアニストのようで、ワールドツアーの一環としての帰国ライブとのこと。

“スムーズジャズ”とは初めて聞いた言葉ですが、彼女の場合、覚えやすい短いメロディーの反復による心地良い楽曲が特徴で、まとまりすぎという感じもしますが、それがフュージョンから派生したスムーズジャズと言われるゆえんか、リリカルでメロディアスなピアノ演奏にはコントラバスあたりとのデュオが似合うんじゃないかと思っていたら、第二部ではゲストとして登場した溝口肇さんのチェロとのデュオ演奏が入り、私のニーズとどんぴしゃマッチ！ハッピーなり。(^~^)

ところで公演でCDやDVD等のグッズ販売は今どき当たり前ですが、ビジュアル系をも意識してか、ポートレート(大きいプロマイド)が販売されているのは珍しいのでは。購入者はサインしてもらえますのですが、少なくとも秋吉敏子さんやフジコ・ヘミングさんの公演ではありえないな。(失礼！)

映画「ブーリン家の姉妹」(11月15日/ Bunkamura ル シネマ)

映画。英国チューダー朝を背景とした、ブーリン家の二人の姉妹とヘンリー八世との間に繰り広げられた愛憎物語。交錯してもつれにもつれ合う二人の姉妹の運命がスピーディな展開で息つく間もなく見せられ、どっぷりと引き込まれてしまいました。一族に富と権力をもたらす“道具”として女性が描かれているわけで、女性の方が見られたら不快に感じるかも。

池口史子展 (11月15日/渋谷区立松濤美術館)

絵画展。新聞の評と共に載っていた縮小された絵画を見て、明るめの爽やかで澄んだ鮮やかな画風なので、こりゃ私好みの絵かもしれないと思いついて足を運びましたが、実物を見るとそーでもなくて残念。

ただ過去から現在の作品展示から、作風の変遷を見ると、以前は暗～い画調だったのに、ある時期から劇的に変化した様を見ると考えました。この人に一体何が起きたんだろう、っと余計なお世話か。

ヴィルヘルム・ハンマースホイ展 (11月15日/国立西洋美術館)

絵画展。こちらの方は生涯を通して暗い・・・(^_~)

「静かな詩情」と銘打った展覧会で展示されている絵は、誰もいない室内、後ろ姿の女性・・・等々、全く音を感じない絵というの珍しい。モノトーンを基調とした画面で、何やら謎めいた静けさを感じます。

鑑賞者を心理的に画中に導き、何を物語っているのか、その絵に秘められたドラマをあれやこれや詮索してしまいますが、奥さんの肖像画「イェーダ・ハンマースホイの肖像」の前に立って思ったこと・・・。38歳には見えない年老いた容貌、窪んだ眼の下のクマ、荒れた肌、そして無表情で生気のない表情。自分の奥さんだったらもうちょいベッピンさんに描けばいいのになぁ。夫婦不仲にならなかったのかしらん、っとこれも余計なお世話か。

口直し(?)に常設展示のモネ、ルノワール、ゴッホの絵を見て色彩のシャワーを浴び、そーだよなぁ、色ってこんなにあるんだよなぁと妙に納得。

安藤忠雄 講演会 (11月20日/第一ホテル)

講演会。メディアへの露出度満点の建築界のカリスマ。講演では石原都知事の悪口をちゃかして散々言うけれど、「海の森プロジェクト」や「2016年オリンピック招致」などを包含した『TOKYO改造計画』をしっかりとタッグを組んで邁進中。活動の範囲は建築家という枠を飛び越えているようですが、逆に飛び越えるほどの活動家を現代では建築家と呼ぶのかも。

かまくら名人劇場 よったり寄ったり競演会 (11月22日/鎌倉芸術館 小ホール)

落語会。林家木久蔵、柳家喬太郎、立川談春と三者三様のお馴染みの噺家さん達が勢揃い。

喬太郎は談春がトリに控えているせい较轻めのネタで「うどんや」。

談春は昨年、「談志・談春 歌舞伎座親子会開催」、「フェスティバルホールでの独演会開催(2,700名を満席)」、「赤めだか・講談社エッセイスト賞受賞」等々ノリにのって、現在チケット入手が最も難しい落語家と呼ばれています。ネタは「不動坊」。

私ごとですが、最近では高校時代から慣れ親しんだ落語に何十年かぶりにどっぷりとつかり、通勤時には落語を聴き、家ではビデオを見て、コーヒーショップで落語関連の本を読み、定席寄席や落語会に通ったりと落語三昧の日々。

初めての著書「赤めだか」は談春が高校を中退して談志に弟子入りし、前座、二ツ目を経て真打ちになる直前までの自叙伝(回想型青春記)であり、修行中は人間としての自由も権利も認められず、奴隷のような過酷な生活を強いられる弟子たちの笑いあり涙ありの奇想天外な日々を綴った群像劇であり、登場人物たちの際だった個性が立体的に色鮮やかに迫ってきて、文字通り“一気”に読ませます。またここには、談志の指導者としての希有な奇才ぶりが浮き彫りにされ、なぜ立川流は優れた落語家を次々輩出するのか納得させられると同時に、「師匠とは、弟子とは何か」という師匠と弟子との“絆”について深く考えさせられます。

談志は破門されてからは柳家小さんとは絶縁状態となり、師匠の葬儀にすら参列しませんでした。談春は『(参列しないのは)おれの心の中には、いつも小さんがいるからだよ』とつぶやき、その言葉からは師匠を敬愛してやまない“情”を感じることができます。小さんから談志へ、談志から談春へ、そして今談春から彼の弟子へと引き継がれるであろう師弟間の情愛を綴った本書は、落語界の裏話を超えて読み手に熱く迫ってきます。

立川流一門の落語は聴く人によって好き嫌い(私にとってはビミョーだな)はあるでしょうがやはり特別で、立川談志という落語界のダダイストと同じ時代を生き、目撃証人となったということだけでも落語ファン冥利に尽きます。おっと脱線してしまいました。話を落語会に戻して……。

色物は講談で女性講師の一龍斎貞友さん。人間国宝である一龍斎貞水のお弟子さんですが、なんと声優でもあり、「忍たま乱太郎(しんべエ役)」をはじめ「ちびまる子ちゃん(おかあさん役)」、「クレヨンしんちゃん(マサオ役)」と聞き覚えのある声。ちびまる子ちゃんは毎週見ているし、クレヨンしんちゃんも一頃はよく見ていたので、そのせいか漸を聴いていてもどうにもアニメキャラの顔が浮かんでしまいます。不思議に感じたのは、三人家族の情愛を貞友さんは、父、母、そして小さな男の子の声色を年令、性別、性格とをそれぞれ器用に見事に使い分けて表現(発声)していますが、それが即、漸の深みにつながるとは限らないということです。

例えば、80才の高齢の噺家が太夫を演じた時、どう聞いても若い女性の声ではなく、老人のしゃがれた声にしか聞こえなくても、艶っぽさが十二分に伝わり、美しい太夫の姿が目浮かぶことすらあります。器用さが必ずしも芸には結びつかないということでしょうか。話芸での人物描写の奥深さを感じます。

青い卵公演「ぬくもりの空」(11月28日/横浜人形の家 あかいくつ劇場)

劇場クラウン公演。クラウンYAMAさん、オペラ歌手の宮城摩理さん、ピアニストの秋山桃花さんの三人による舞台公演。ストーリー仕立てのバントマイムに音楽(オペラやピアノ)がどう絡んでいくのか興味があるというか、上手いくのか心配でしたが、オペラ歌手、ピアニスト、クラウンとそれぞれの持ち味が出ていて、劇としてもほのぼのとした暖かさを感じるユーモラスなでき映えに満足、満足。

劇中、高音部分の音が思うように上手く出せずに悩んでいるオペラ歌手を、いかにもクラウン的な発想でYAMAちゃんが助けてあげる部分には思わず吹き出していました。宮城さんはミュージカルにも出演され、芝居心もあってYAMAちゃんとの掛け合いは違和感なくとても楽しかったし、YAMAちゃんはその風貌といい動きといい、とってもいい味出しています。大好きなキャラクタです

彼がロシア国立サーカス学校に留学した時に、他生徒のボールジャグリングの高い技術レベルに圧倒され『5個練習おしえて!』と先生にお願いした時に、『なぜ、5個する必要がある。3個でも面白く見せられる。』と言われたそうで、その教え通りYAMAちゃんのボールジャグリングは3個を中心として、ハートが存在するといった感じで、見ていて口元がゆるみます。ナンバースなど超絶技巧を見慣れた人にとっては新鮮でしょう。

ポリショイバレエ「ドン・キホーテ」(12月4日/東京文化会館 大ホール)

バレエ公演。ドン・キホーテはストーリー性がある演劇的な要素でも楽しめ、美しい舞の数々に見せ場も盛りだくさんでうっとり。特に豪快なグラン・ジュテやグラン・パド・ドゥでの数十回転のフェットなどで観客席も大いに盛り上がっていました。

西洋の舞踊と東洋の舞踊との違いについては『洋舞がもし大地から解放されて高く天上へ自由を求めて外へ外へと跳躍する表現だとすれば、邦舞は地上を恋い慕い大地に愛着するあまり、徘徊して去り難いという表現だといわねばならないのではないかと。またこの西の放射的動きは天上憧憬的、東の内包的動きは地上愛着的だともいえる。』と郡司正勝さんが述べられたように、バレエは天へ天へと向かっているのを見ていて気分が高揚してきます。この高揚感はサーカスを観た時にも感じるもので、サーカスもある意味「天上憧憬的」志向なのかなと思ったりします。

またこの両者、天上憧憬的と地上愛着的との違いはジャグリング(曲芸)の世界でも言えるかもしれません。寄席での太神楽曲芸は座布団の上を立て膝をつきながら演じることも多々あり、演目としても傘の曲、一つ毬の曲、くわえ撥の曲などはいかにも「地上愛着的」であり、ナンバースジャグリングのように出来るだけ高く高く投げ上げる様子は「天上憧憬的」といった感じがします。

ところでバレエをテーマとしたコミックというのはかなりの種類出ているようで、バレエをもう少し深く知りたくて、最近選んだ教科書(?)は「舞姫 テレシコーラ(山岸涼子)」と「Do Da Dancin'!(榎村さとる)」。面白すぎっ!大人買いして一気読みっ!

上野鈴本演芸場 中席(夜の部)(12月13日/上野鈴本演芸場)

定席寄席。色物は翁家和楽社中による太神楽曲芸。おっ!女性曲芸師だ。翁家小花さんという方です。五階茶碗をしっかりとこなすほどの腕前。最近寄席も女性芸師が増えてきて舞台が華やかになるし、やっぱりいいもんだわ。

本屋に行くと言語関連の書籍や雑誌が目につくところに置いてありますが、今だ落語ブーム健在か。入門書の類には「まずは定席寄席(末廣、鈴本、浅草、池袋)に行こう」と書いてありますが、どうかな。落語をこれから初めて聞いてみようという人には、あのマツリた空間と流れに耐えられるか!? まずは手始めとしてTVでよく見かけられるような噺家のホール寄席(落語会)とかに行くことを薦めます。

tomoko 08 クリスマス・ソングライブ(12月15日/栄区民文化センター リリスホール)

ポップコンサート。なんと2008年だけでも tomoko さんのライブに三回行っていました。今回もいつもの通りの地元でのクリスマスライブ。私のような常連も多いようで、アットホームで暖かな雰囲気でのコンサートでした。

倉本裕基 ピアノコンサート(12月20日/サントリーホール 大ホール)

ピアノコンサート。東京工業大学の理学部を卒業して、プロの音楽家となり、運命のいたずらか、まず韓国で彼の音楽は受け入れられ、ソウル公演での連続完売記録やCDの驚異的な売り上げなど韓国での人気は絶大。その人気は逆輸入された形で、最近メディアで「韓国で最も有名な日本人」として取り上げられるようになり、日本国内でも度々コンサートが開催されるようになりました。

自然やロマンを主題とした抒情的で美しい親しみやすいメロディーからなる楽曲は、“癒し系”ピアノ演奏の代表格かも。トットとしたしゃべりとおやしギャクの連発は意外で結構おしゃべりでも楽しめました。彼の曲は韓国ドラマや映画のBGMでは頻りに使用され、当然「冬のソナタ」でも使われていて、聞いていると思わずそのシーンが思い浮かぶようです。(冬ソナは夢中で見ていた...^^)

第七十五回記念 書壇院展(12月22日/東京都美術館)

書道展。12月に清水寺の貫主がその年を表す漢字一文字を揮毫(きごう)する様はもはや年末の風物詩のひとつと言えます。書道は芸術。その芸術の制作過程を人前で披露する、例えば床に広げた大きな大きな紙にほうきのような筆で文字を書くといったような揮毫のパフォーマンスをテレビ等で最近よく見かけられるようになりましたが、世間では書道ブームなんですよ。

書道って何だろうと、知人の作品が展覧されていることもあり初めて展覧会に行きましたが、あるわあるわ、いろんな書体の文字が一杯! 正直何をどう鑑賞すべきか何が何だかよく分からない。(>_<)

アートシーンで物議を醸し出している村上隆さんの言葉、「芸術を解する心は、感性が3割で、あとの7割は学習。コンテキスト(文脈)を学習しなければ、ものの良しあしや価値基準はわからない。」

感性には乏しいが芸術に興味がある私にとっては勇気づけられる言葉で、芸術分野でもそれなりにスポーツにおける筋力トレーニング的な意味合いの基礎学習をしなければダメなんだと解釈しました。そこで書道というものを勉強しようと選んだ教科書(教科書はいつもマンガ ^^;)が、「とめはねっ! 鈴里高校書道部(河合克敏)」という書道をテーマとした学園コミック。書道部での出来事を通して書道そのものと、取り巻く世界を分かりやすく説明してくれて勉強になります。

TOKYO雑技京劇団 上野公園大道芸(12月22日/上野公園)

大道芸。オーソックスな演目が続きます。ディアボロ、頭頂花罫(花瓶を頭の上で回す)、滾杯(グラスを使ったコントーション)、そして自転車。私自身かなりの数の雑技を観ているので、今回の彼らの技術の成熟度と演技内容は大道芸という環境を差し引いても少々物足りないけれど、それでもそこは雑技とあってかなりの身体能力があり、演出をもっと大道芸(路上パフォーマンス)風にアレンジすればもっと良くなるはず。寒空の中お疲れ様でした。

世界まるごとクラシック(12月22日/東京国際フォーラム ホールA)

クラシックコンサート。青島広志(指揮・お話・構成)、川井郁子(ヴァイオリン)、清塚信也(ピアノ)、小野勉(テノール)、THEATER ORCHESTRA TOKYO といったメディアではお馴染みの面々による『世界で一番楽しい! クラシックコンサート』。演奏される曲はクラシックの名曲の数々で、青島先生の演奏者へのツッコミ放しのトークに会場も爆笑の中大いに沸きかえっていました。

ちなみに私のクラシックの教科書はもちろん「のだめカンタービレ(二ノ宮知子)」。

映画「英国王 給仕人に乾杯!」(12月27日/日比谷シャンテ シネ1)

映画。ナチスやソ連の侵攻に翻弄されたチェコの重苦しい時代のさなか、平凡な給仕人の半生を軽快なタッチで描いた作品。ナチズムやスターリニズムといった体制の中、したたかにホテル王への階段を登りつめた至福の時に起こるオチは、コミカルでもあり、哀れでもあり。

桂三枝の笑ウインドウツアー-2009(1月9日/有楽町朝日ホール)

落語独演会。演者の桂三枝、桂三段、桂三歩ともネタは全て創作落語。三枝さんと言えば私にとってはTV番組「ヤングお!おー!」ですな。古っ! 当時からの人なつっこい笑顔としゃべりは健在で、初めて出したという写真集を買ってサインをいただき握手してもらって大満足の落語会でした

それと江戸と上方の落語の違いも感じることはできましたが、やはり出囃子がないのは淋しい。

創作落語の「鯛(いけすの鯛)」は気に入った。是非もう一度聴きたい作品です。いけすに入ってきた新入りの鯛と二十年住みついている主(ぬし)の鯛との心暖まる交流を描き、いけすでの生き残り方を伝授される新入りの身に何が起きるのか、そして思わずほろりとしてしまう結末。

庄司沙矢香 ヴァイオリン・リサイタル (1月10日/鎌倉芸術館 大ホール)

クラシックコンサート。TV番組「情熱大陸」でも取り上げられた、凄い経歴を持っている若手バイオリニスト。名器ストラディヴァリウスの中でも最も優れていると言われる「ヨアヒム」を自在に操り・・・とのことでも、ド素人の私には音色などの違いは全く分らんが、でも心地良いことは確か。心に栄養をいただきました。

浅草演芸ホール 二之席後半(夜の部) (1月16日/浅草演芸ホール)

定席寄席。二十以上もの演目が続く中、色物の北見マキさんの奇術に感動。久々にこれぞ“ザ・マジック”という演技を堪能。素晴らしい！十数分の演技でお喋り無しにシルク、ロープ、コイン等の小ネタを次々と披露しますが、現象が鮮やか、ルーティンが練られている、リズムが良い、無駄がない、技術に長けている、そして観客の視線を自在にコントロールし、なにより“何を表現する奇術か”が明確に伝わってきます。つまり不思議さが老若男女問わずに分かりやすい。(何を見せたいのか、ジコチューの演技が最近のマジックでは目につく)

披露されたネタは、時々手にとっては参考になっている「ステージマジック(北見マキ著/東京堂出版)」から幾つか選ばれていて、生でご本人による模範演技を拝見した格好になりとても参考になりました。マジックをされる人には是非見て欲しい、いや見なくてはならない演技。

ニクーリン・サーカス (1月23日/JCBホール)

サーカス。楽しかったぁ！シルク・ドゥ・ソレイユもいいけれど、違ったタイプのこんなにも良いサーカス公演があるのだからもっともっとたくさんの人に観に来て欲しいものです。

ドミトリー・チェルノフさんのボールジャグリングはオリジナリティ溢れ魅惑的。説明が凄く難しいのだけれど、ハンドボールくらいの大きさのボールが近未来的衣装のポケットに入っています。(両足、腰などにポケットが付いていてそれぞれにボールが入っています。)テクノポップ(?)調のBGMにあわせて、身体全体でステップを踏むように、ポケットからボールを取り出してジャグリングをするので、床にボールを置くことはありません。フィニッシュはポケットから次々とボールを取り出しながら7ボール。ドロップ無しの完璧なパフォーマンスに驚嘆！このプログラムの完成までにはどれだけの時間と努力が費やされているのだろう。感服。

鎌倉芸術館ゾリスコンサートVol.29 (1月25日/鎌倉芸術館 大ホール)

室内楽コンサート。日本屈指の弦楽器の名手たちが集り常設弦楽アンサンブルとして活動を続けてきた「鎌倉芸術館ゾリス」も今回で29回目の演奏会で、今回はオール・ヴィヴァルディ・プログラム。お決まりの「四季」は何度聴いてもいいなあ。

関口知宏が旅した地球 ~出会い・ふれあい・かたりあい~ (2月7日/横浜市栄区公会堂)

講演会。俳優稼業が上手いはず、挫折して一時期は引きこもりもしましたが、鉄道紀行の番組で大ブレイク。日本、中国、欧州での鉄道の旅でみせた飄飄然(ひょうひょうろうろう)とした雰囲気での喋りが会場全体を和ませます。多くの人に助けられ人脈も広がり、持て余していた感のある音楽や絵画の才能と相まって、今後は鉄道紀行と違う新しい活動を開始しはじめるようで、眼前には進むべきたくさんの道がひろがり楽しそうでした

くるくるシルク Vol.8 (2月20日/スタジオP.A.C)

舞台公演。幼なじみの三人組が何の束縛もなくその場限りの発想でバカやっで遊んでいるといったような楽しくもあり情けなくもあり、でもそこには変わらぬ友情で助け合いがあったりと、そんな「くるくるシルク」のシリーズ公演の基本路線は変わらないようですが、今回は映像とのコラボレーションによる演技を大幅に取り入れての新しい試みでした。

例えば海原で遊ぶシーンでは、以前は舞台を横断する青い布を床上で揺らして表現していましたが、今回はそれに加えて背面の大きなスクリーンに海そのものの映像を映し出し、映像の中でも三人組が出てきたりして非常に面白い作りとなっていました。その他にも映像を利用した演技があり、どれもとても面白いのですが、ちょっと待ってえ！映像は使い勝手がよく、現実ではあり得ないことを表現でき、インパクトがあって笑いとやりやすいのですが、スパイス的な利用ならまだしも、あまりに映像に依存したパフォーマンスは個人的には再び足を運びたいとは思いません。

今回の公演は個人的には、映像利用のさじ加減としてギリギリOKといったところですが、「くるくるシルク」を長年見ている私個人としては、やはりおバカ三人組の汗が飛び散って息づかいが聞こえ、お互いの緊張感とハプニングが伝わってくるような、そんな生身の演技の方が好きです。

映画「おくりびと」 (2月26日/横浜シネマリン)

映画。アカデミー賞という冠が付かなくてもフツーに良い映画。登場人物それぞれの歩んできた人生の深みを感じさせる演技、四季折々の美しい風景映像、そしてチェロによる重みがあって包み込むような音楽等々、全てしみ込んでいきます。このトシになると親族のみならず友人たちをも既に幾人か見送っているので、ボロボロと泣きました、泣きました、泣きました。

加山又造展 (2月27日/新国立美術館)

絵画展。久々に脳をピンピンと刺激された美術展。波長があうのかも。画伯は絵画以外にも、陶芸や着物の絵付け、天龍寺法堂の天井画、日航ジャンボ機の室内装飾、あるいは車のボディペイントと、その創作活動は多岐にわたり常に新しいものに挑戦し続け、戦後の日本画壇に多大な功績を残しました。

古典に“倣う(ならう)”ことで、伝統的な表現を尊重した上で、現代的な新しい技術を積極的に取り入れて独自の世界を築き上げ、日本画の新たな可能性を切りひらいたと賞されます。“倣う”とは真似をするということですが、倣うことについてはこのように仰っています。

『私は古画その他工芸品などから平気で写しをする。というのは、自分が伝承者ではないという確信があるからである。伝承者には写ししかできない。伝承の延長になってしまうからである。』

単に作品を忠実に模写するというのではなく、倣うという行為で芸術性の本質的な部分を探究することにより、自らのオリジナリティを創造することなのでしょう。か、オリジナリティとは何かを考える上で非常に深みのある言葉ですね。

[安部 保範]



書籍紹介

【神と旅する太夫さん】

・北川央 (著) / 北川央・出水伯明 (写真) / 岩田書院 (発行) / 104 ページ / 1,500 円 (本体) / 2008(H20).12.24 初版

例えば幕末期から明治期にかけて渡航した芸人について調べると、必ず出てくる言葉が『大神楽(太神楽)』。大神楽って何だろう?と知りたくなった時に手に取って頂きたい本です。国指定重要無形民族文化財『伊勢大神楽』のことがよく理解できることでしょう。

著者の北川さんは大阪城天守閣研究副主幹であられ、専攻は織豊期政治史ならびに近世庶民信仰史・大阪地域史ですが、多忙なかたわら精力的に伊勢大神楽の研究に携わっておられます。既に多数の研究論文等を発表されていますが、本書は門外漢の一般の人にも分かりやすいようにと豊富な写真と共に、大神楽という芸能全般について平易に分かりやすく解説がされています。今までの大神楽(太神楽)の書籍は研究寄りで内容・記述共に難しかったり、あるいは関係者によるもので内容的に偏りがあるものが多かったのですが、本書は非常にバランスが良く『大神楽って何?』と聞かれれば『まずはこの本を読んで。』と即座に答えられるほどお薦めの一冊です。

1999年、北川さんに案内いただき、大阪府羽曳野市の神社での山本源太夫社中の総舞を楽しんだことは、今でも鮮明に記憶に残っています。大神楽という芸能自体が、地域の風景に溶け込んでいる様は大衆芸能の原点を見る思いがしました。

[安部 保範]



編集後記

二月三日、泡坂妻夫逝去(享年七十五)。

本名 厚川昌男。日本推理作家協会賞、泉鏡花文学賞、直木賞など名立たる賞の数々を受賞されましたが、奇術愛好家としても有名で、自身の名を冠した奇術の賞に「厚川昌男賞」があり、奇術に関する著書も多数あります。私が強烈にインパクトを受けた作品が、マジック好きな方ならご存じであろう「しあわせの書 - 迷探偵ヨギガンジーの心霊術(新潮文庫)」。この本には技巧を凝らしたとんでもない仕掛けがしてあります。仕掛けについては明かせませんが、マジックに興味のある方は是非入手してみてください。キーワードは“ブックテスト”です。

訃報に接して久しぶりに書棚にある先生の著書とこの本を手にとってみましたが、「しあわせの書」は何度見ても凄い出来で今さらながら驚きです。謹んで泡坂先生のご冥福をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

編集発行人: 安部保範(神奈川県横浜市栄区 在住)

Webサイト: JugPal <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場 <<http://www.chansuke.net/>>

E-mail: misc@chansuke.net

